コラム 学校教育と文化財 ―史跡首羅山遺跡（福岡県久山町）の取組―

学校教育における文化財の活用は、様々なカリキュラムが組まれ、遺跡についても各遺跡の特徴を生かした取組が全国で実施されている。地域の遺跡の説明や現地見学などを取り入れた「歴史学習」、勾玉つくりや稲つくり、発掘体験などの「体験型学習」が活発に行われ、学芸員や文化財担当者による出前授業、遺物の貸し出しなども行われている[1)]。

久山町でも平成20年度から、首羅山遺跡を題材に小学校の授業を継続しており、現在では年間30時間の授業を行っている[2)]。ここでは７年間にわたる授業の紹介と、課題について伝えたい。

久山町は150万都市福岡市の東に位置し、人口約8300人、小学校２校、中学校１校がある。首羅山遺跡は、平成17年度に調査を開始し、平成25年３月に国史跡に指定された中世山林寺院跡である。調査開始時にはまさに荒山で、地域の伝承のみが残る全く無名の遺跡であった。小学校での授業を開始した平成20年度は、実質的な発掘がはじまった年であり、まだ遺跡の様相もおぼろげにしか見えていなかった。これまでの７年間、子どもたちは藪のなかに埋もれている遺跡にふれながら歴史の解明の過程を体験してきた。

「私たちの首羅山遺跡」の概要　首羅山での総合的な学習の各年度における取組は以下のとおりである。

平成20年度　授業開始のきっかけは、当時久原小学校に勤務していた安部憲司先生から、社会科の授業のなかで地域の史跡めぐりを行いたいとの相談を受けたことにはじまる。この年は地域に残る庚申塔や寺社、昔の小学校の跡地など身近な歴史をめぐる授業を行った。そのなかで、首羅山遺跡にもふれ、一般向けの現地見学会に６年生の一部が参加した。

平成21年度　久原小学校６年生による首羅山遺跡での現地授業を開始した。卒業制作に壁画「私たちの首羅山遺跡」が制作される。以後久原小学校では毎年６年生が首羅山遺跡で現地授業を行うようになる。

現地授業

平成22年度　出土瓦の拓本などを行う。西谷地区の発掘現場を見学し、卒業制作のステンドグラスに首羅山遺跡の様子を盛り込む。

平成23年度　総合的な学習「わたしたちの首羅山遺跡」を開始した。地域の歴史のボランティアも交えた学習を進め、卒業制作のステンドグラスに首羅山遺跡の様子を盛り込んだ。

平成24年度　山田小学校の授業も開始し、町民に向けた山田・久原小学校による総合的な学習合同発表会「首羅山サミット」を開催した。合唱曲「首羅山いつまでも」が久原小学校でつくられる。

平成25年度　国史跡指定。史跡指定記念映画「私たちの首羅山遺跡」を制作した。小学生が出演し、ナレーションを行った。町内13箇所で上映会を開催し、累計で600名の参加があった。秋に行った国史跡指定記念イベントでは町内の全児童・生徒800名を含む約2000名（町民の約25％）が参加し、シンポジウムや雅楽師の東儀秀樹氏との合唱の共演を行った。

平成24年度「首羅山サミット」

平成26年度　久原・山田小学校、久山中学校合同で首羅山遺跡の絵本製作に取り組む。首羅山遺跡を題材にした道徳の授業を実施予定である。

取組の特徴と成果　「わたしたちの首羅山遺跡」の取組は、地域の歴史を知るということだけにとどまらず、それをどうやって守り伝えていくかを考えることを目的とする。現地を踏み、遺跡調査を支えた地域住民、調査担当者の話を聞くなど、歴史を体感するとともに、それを守り伝える心にも深く探求していく活動が中心となっている。

取組の特徴は２点ある。１点は、継続的な学習であり、学習内容が年々深化している点である。きっかけは社会科の現地学習であったが、安部先生を中心に「本物の体験」「地域の素材」「多様な活動」をスローガンに、継続して授業を行い、平成23年度から総合的な学習の中でカリキュラム化、平成24年度には小学校２校の合同学習を開始し、翌年の国史跡指定記念イベントへとつなげた。つまり、毎年同じ学習内容を繰り返すのではなく、前年度までの学習内容をふまえたうえで、遺跡調査の進展に伴う新たな発見などから教材開発をおこなっているのである。また、発表の機会をもつことで、低学年の子どもたちも興味をもち、６年生の首羅山の授業を待つようになる。授業開始までに動機づけができるため、学習意欲の高い授業を行うことができるのである。

２点目は地域に還元する学習であるという点である。学習内容の成果を町民にダイレクトに発信する場を設けることで、「伝える喜び」を感じるとともに、達成感を味わうことができる。地域に発信することで、「自分たちが遺跡を守っている」という自覚と、郷土を愛する心の形成にもつながっている。

平成25年度のシンポジウムでは、遺跡に携わる多くの地域の方々に対し「感謝の気持ちが湧いてくる」という発表や、「目に見える史跡も目に見えない文化も受け継いでいかなくてはいけない」「ぼく達の夢は首羅山で国や文化を超えた交流をすること」などの発言があり、地域を愛する心の醸成や、文化の継続などへの高い意識が感じられる。このような活動の成果は「郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心を持つ」ことを目指した平成20年度改訂の道徳の学習指導要領にも通じるものである。

また、子どもたちの情報発信の力は想像以上に大きい。首羅山遺跡が発見からわずか８年で国史跡になったのは、遺跡のもつ価値とともに久原・山田小学校の取組が地域住民を動かしたことによる。平成21年度の久原小学校の卒業制作「私たちの首羅山遺跡」の壁画に代表されるように、無名の遺跡を守り伝えようという子どもたちの学習の取組を知った地域住民が、首羅山遺跡の保存へと大きく動いたのである。その動きは見学会での猪汁のふるまいや、小学校の発表会への参加、史跡指定への理解など、さまざまである。さらに文化財のボランティア団体「久山町歴史文化勉強会」のメンバーが学校での授業をサポートするなど、学習の充実にもつながっている。

卒業制作壁画「私たちの首羅山遺跡」

今後の課題　これまでの久山町での取組は、主に安部先生を中心に行ってきた。目下の課題は後継者の育成である。学校に課せられたカリキュラムは複雑多岐にわたり、地域の歴史を教材として取り入れる余裕がないという実情も考慮したうえで、取組の継続のために、数年分の計画を早急に立て、できるだけ多くの先生方に関わってもらいながら、学校と文化財担当者が計画を共有し、学習を進めていこうと考えている。

将来にわたって遺跡を守り伝えていくのは私たち文化財担当者ではなく、地域であり、その担い手は子どもたちである。地域に残る遺跡を核にした計画的な学習によって、郷土を知り守ろうとする心が育まれるなら、それは地方が抱える将来のまちづくりや地域づくりといった重要な課題解決の一助になるのではないだろうか。年に一度の首羅山遺跡の見学会では、子どもたちがたくさん参加してくれる。そんな状況をみていると、首羅山遺跡の将来を見据えながら、これからも「わたしたちの首羅山遺跡」の授業を継続し、遺跡を守り続ける心の種を蒔いていきたいと思う。

久山町は小さな町であり、できることも限られている。しかし、子どもたちや学校が立派な地域の一員として町を担うことも「久山町だからできること」なのかもしれない。

（**江上　智恵**／久山町教育委員会教育課）

1）2007『遺跡の教育面に関する活用』奈良文化財研究所
2013『こどもたちにむけた史跡の活用―第38回全国遺跡環境整備会議―』

2）久原小学校・山田小学校の「わたくしたちの首羅山遺跡」の授業の取組は平成26年11月に博報賞（日本文化理解教育部門）、文部科学大臣奨励賞を受賞した。